

みしましきょうどしりょうかん きかくてん
三島市郷土資料館 企画展

三島のまつりの今

平成28年 1/3(日)~4/10(日)

ドンド焼き・ヤッサモチ・
オテンノウサン・
まどろみ
間眠神社の例大祭



三島市郷土資料館

写真：上段 佐野ヤッサモチ(3枚)、安久オテンノウサン
下段 佐野ドンド焼き、安久ドンド焼き、伊豆の国市長崎区間眠神社の大注連縄づくり

ドンド焼き

ドンド焼きとは小正月（1月15日前後）に行われる火祭りで、竹や正月飾り、書き初めなどを集めて積み上げ、これを燃やす子どもたちが主体の祭りです。伊豆から関東・甲信地方にかけては道祖神（サイノカミとも呼ばれます。村境などの道端にあって、外から侵入する災いを防いでくれる神と信じられてきました。）と関連した祭りとして、かつては炎の中に道祖神を投げ入れる地区もあったそうです。しかし、近年ではその関係は薄くなるか全く意識されなくなっているようです。火で米粉の団子を焼くこと、積み上げた山の真ん中にオンベと呼ばれる長い竹を立てることなどが主な共通点です。以前は1月14日か15日が行事の日でしたが、現在は地区の都合によって様々な日に行われています。

ドンド焼きの流れ（安久地区）

中郷にある安久地区のドンド焼きを例に祭りの流れを示します。

安久では従来の子供会とは異なる「安久子供クラブ」という自主的な団体により実施されています。昔は竹を集めるなどの祭りの準備も子どもが何日もかけて行っていたそうですが、今は大人が中心になって進めています。平成27年の祭りは成人の日（1/12）の朝に行われました。（①1/11まで ②～⑤1/10朝 ⑥～⑨1/12朝）

①前日までに正月飾り、書き初めが集められる。



②中心にオンベ竹を立てる。縄で3点で固定する。



③正月飾りを山にし、竹で囲っていく。



④竹の葉を縄でまとめる。



⑤オンベ竹の固定を確認して事前準備を完了する。



⑥当日の朝、人が集まると点火、すぐに炎があがる。



⑦火が落ち着くと、団子を焼き始める。



⑧豚汁、汁粉が振舞われる。



⑨団子は持ち帰る人もいるが、タレを持参してその場で食べる人も多い。

道祖神ごとに行われるドンド焼き (佐野地区)

佐野地区には多くの道祖神が残されており、ドンド焼きもほとんどこの道祖神ごとに分かれて行われます。そのため、それぞれのドンド焼きは小規模で、竹などの積み上げ方にも場所による違いが見られます。

ドンド焼きの数日前から各家庭の正月飾りで道祖神が飾られます。正月飾りは前日または当日の午前中には川原や田んぼなどに積み上げられ、夕方に点火しドンド焼きが始まります。

数年前までは子供会が中心でしたが、今は組が中心となる地区の祭りとなっています。平成27年は1/11(日)、三島成人式記念駅伝大会のあった日の夕方に行われましたが、強風のため翌日に持ち越した組もありました。



ドンド焼きの炎と焼かれている団子。
団子の直径は5～6cmほどが多い。



焼けた団子を食べる。菓子や酒が
出されるところもある。

飾り付けられた道祖神

道祖神の上に正月飾りを積み上げるもの(写真①)、小さなやぐらを作って正月飾りや注連縄で飾り付けるもの(写真②③)など様々で、道祖神が残っていない場合も道端の決まった場所(かつて道祖神があった場所でしょうか。)に集められます。



佐野・下村



佐野・中村



佐野・梨坂

ドンド焼きの形いろいろ



中心にオンベ竹のある
一般的な形のもの



中心のオンベ竹が
とくに高いもの



オンベ竹がなく、太い竹で
覆われたもの

新しい住宅地のドンド焼き (佐野見晴台地区)

佐野見晴台は市内北部の丘陵地にある比較的新しい住宅地です。平成27年は1月18日(日)に行われました。ここでのドンド焼きは単に子どもたち中心の祭りというだけでなく、来賓や町内会長のあいさつから始まり、災害時の炊き出しの訓練にもなる餅つきやシャギリの演奏など様々な催しが行われ、朝から始まり午後に終わる長時間の行事です。住民は子供の有無にかかわらず参加しており、見晴台が規模の大きい町内会ということもあって参加者が非常に多くなっています。町内会の新年賀詞交換会も兼ねた地域のまとまりを保つための重要な行事とされています。



大きなドンド焼きの炎



餅つきも行われる



大勢の参加者

ドンド焼きの今

ドンド焼きは各地区に比較的好く残っている伝統的な祭りといえますが、その内容には変化が見られます。昔は子どもたちの集団が主体の祭りで、竹も子どもたちが切り出しに行くなど準備段階から子ども中心でした。また、隣の地区の積み上がった山をこわしに行ったり、自分たちのものを守るために番をしたりしていたそうですが、そのような荒っぽいできごとも見られなくなって久しいようです。

今は実施の中心も子供会、町内の組(隣り組)、自主的な団体(安久子供クラブ)など様々で、準備段階での大人の関与が強くなっています。また、実施日も固定ではなく地区によって都合のよい日を選ばれるようになっています。

ヤッサモチ (佐野地区中最寄)

佐野地区は上・中・下最寄の3地区に分かれています。このうち、中最寄の山神社の祭りにヤッサモチがあります。20年ほど前までは毎年1月16日夜と17日が祭りの日でしたが、現在は16日に近い土曜日の夜と翌日に行われています。

16日に近い土曜日(平成27年は1月17日)の夜に男性が集まって餅をつき、深夜に最寄内を「ヤッサーノヤッサー」と声をかけながら回った後に、山神社に奉納します。翌日は朝から山神社で祭りが行われます。餅つきはその年の当番の家で行われます。中最寄はさらに中村、藍の沢、田中の3組に分かれおり、餅つきはすべての組の男性が参加しますが、最寄内を回って山神社に奉納するのは当番の家が属する組の男性だけです。

かつては最寄全体の祭りでしたが、新しい住民が増えていったことや神社が持っている土地の管理の問題などから現在は約40戸の氏子が講を作って祭りを行っています。

ヤッサモチの流れ

- ① 土曜日夕方、当番の家では参加者に振舞われる酒食や餅つきの準備が進められます。夜7時頃から次第に組の男性たちが集まってきます。
- ② 当番以外の組の人達は集会所に集まります。7時半頃に当番の呼出しに応じて会場に移動し、餅をつきます。当番組以外の人達はこの餅つきを終えて解散になります。
- ③ 当番組の男性たちは当番の家で食事やお酒を振舞われます。年代の異なる人たちが集まり昔話に花が咲きます。
- ④ この間に当番によって餅が大きな鏡餅に整えられ、水引が付けられます。
- ⑤ 夜11時頃から当番組の餅つきが始まります。ここでついた餅も鏡餅にされ、翌日に使われます。
- ⑥ ④で作った鏡餅を捧げて、最寄内を回ります。鎌を持った人を先頭に、鏡餅が続き、その後ろに当番組の男性たちが付いていきます。「ヤッサーノヤッサー」の掛け声とともに山神社へ向かいます。
- ⑦ 山神社に登ると鎌で餅をひと切れ切り取り、半紙に載せて奉納します。
- ⑧ 翌朝、山神社で祭りが行われます。2回に分けて作られた鏡餅も切り分けられて各戸に配られます。



②餅つき

10人ほどの男性が「ヤッサ、ヤッサ、…ヤッサー」という掛け声とともに、ヒメシャラの棒で餅をつく。餅つきの最中、臼は傾きながら回転させられる。時々餅を頭上高くに持上げ、「イヤッサー」という大きな掛け声をかける。



きれいになった餅

昔のヤッサモチは餅をつく勢いで臼が転がったりしたそうです。また、餅は汚れていた方がよいとされ、屋根や風呂釜の煙突などにこすり付けられ、泥や煤が混じって黒い餅になってしまったそうです。ただし、今ではそんな荒々しさもなく、きれいな鏡餅が作り上げられています。また、50年ほど前までは餅つきは若い衆の役割でしたが、若者が減り、各家から世帯主などが出てきて行くようになりました。

当番は約40年に1度のため、この役割に携わるのは一生に一度の大きなできごとです。ただし、現在増えてきている高齢者のみの世帯では受持つのが難しいため、当番を受持つ家は減ってきているそうです。

オテンノウサン

愛知県の津島神社や祇園祭りでも有名な京都の八坂神社に祀られる牛頭天王は疫病を防いでくれる神として全国各地で信仰され、天王信仰・祇園信仰などと呼ばれています。

中郷地域の大場など5地区（大場、梅名、安久、中島、函南町間宮）では7月初めの土曜（昔は7月6日）にオテンノウサン（お天王さん）のお祭りが行われています。この祭りは夜に半裸の男性が神輿を担いで回り沿道から激しく水を掛けられる、神輿には派手な飾りはなく小さな祠が網目状にかけられた縄で固定されている、といった共通点を持つ独特の荒々しい祭りです。



- ①太鼓 多くの地区で神輿に先行して太鼓が打ち鳴らされる。若者有志による保存会のような団体が組織されていることが多い。中島八坂太鼓の会は15年ほど前、京都の八坂神社に赴き、太鼓についての助言を求めたところ、地方の太鼓はおとなしい京都の太鼓とはすでにずいぶん違っているのでそれぞれのやり方でやればよい、と言われたそうである。
- ②先導者 中島は白檜、梅名・安久は榊の枝を持つ。白檜は生長が早いため、榊は神事で使用する木であるため。その他の地区は提灯を持って先導する。
- ③神輿 半裸の男性が担ぐ。順路上のあちこちで神輿を高く持ち上げ、上下に揺すりながら大きな声をあげる。神輿の形も地区ごとに特徴を持っている。かつては神輿ごと田んぼや人家に入ったり、他地区の神輿とぶつかってケンカになったり、神輿を川に投げ入れて担ぎ手も飛び込んだりと今よりもずいぶん荒々しい祭りだったようである。
- ④カメラマン 大場では祭りを撮影に来たアマチュアカメラマンの姿も見られた。
- ⑤水を掛ける子ども 沿道で見物する大人も水を掛けるが、子どもたちは神輿に付いてまわり、行く先々で水を掛ける。

オテンノウサンの流れ

地区内の神社で祭りの前日から縄づくりが始められ、当日の昼ごろまでには神輿が完成します。縄の太さや祠の固定の仕方は地区によって異なります。神輿づくりの担い手確保はどの地区でも重要で、現在ではそのための組織を作っている地区があります。

夕方、神社を出発し、何回かの休憩をはさみながら数時間をかけて地区内を巡回します。昔はどの地区でも最後に川に神輿を投げ入れていたそうです（現在は間宮のみ）。回り終ると公民館などで直会を開きます。祠は網かけを解き、神社境内か隣接した場所に設けられたヤグラに安置します。これはオコモリなどと呼ばれ、だいたい1週間後くらいでもとの社殿の中に戻されます。

- ⑥火や水 沿道の人たちや主催者によって、神輿にかける水や水を掛けられ冷えた体を温めるための火（ワラやムギワラのたき火）が用意される。
- ⑦見物人 地区の多くの人が見物に出てきている。子どもの駆け回る姿と共に、沿道で腰かけていたり家の窓を開けてそこから見物したりする高齢者も多い。
- ⑧会計 見物人から渡される祝儀を受け取る。神輿の列の最後尾近くにいることが多い。「会計」という表示を高く掲げる、大きな目立つ賽銭箱を持つ、祝儀袋を持つ人を見つけると声をかけに行く、など地区ごとに工夫が見られる。祭りを継続していくためには重要な役割となる。
- ⑨休憩所 何か所か休憩所が設けられ、食べ物やお酒、暖をとるための火が提供される。

子ども神輿

中島、梅名の2地区では昼間に子ども神輿が町内を回ります。神輿の形は本式のをひと回り小さくしたもので、本式の神輿といっしょに作られます。（写真は梅名地区の子ども神輿）



それぞれの神輿

安久（津島神社系）

「御神楽御天王さん保存会」が中心になって祭りを行っています。安久では明治のはじめ頃、祭りが激しくなりすぎたために一時中止されていましたが、昭和 57 年に有志による保存会が祭りを復活させ平成 27 年で 34 回目となります。復活したときに神輿づくりをとりの梅名地区から教わったということで、梅名と似た形になっています。

2本の縄をよったものを使い、縦・横に網かけしていきます。神輿の頭には飾りがついています。



安久の神輿

①大場（八坂神社系）

7本の縄をよった太い縄を使う。頭の飾りは付いていない。

②梅名（津島神社系）

2本の縄をよったものを使い、縦横8列に網かけしている。頭頂部に飾りが付いている。（向かって左は子ども神輿）

③中島（八坂神社系）

帯状になった縄が縦・横に掛けられている。2本の縄を7周回しているのので、14本が並んで見える。頭に小さな飾りがある。

④間宮（八坂神社系）

縦・横に網かけされており、頭の飾りはない。

穏やかになった？ オテンノウサン

禪みんしを締めた半裸の男性が沿道から水を掛けられながら神輿を担いで回るオテンノウサンは現在でも荒々しい祭りではありますが、昔は田畑、民家や商店になだれ込む、隣村の神輿とケンカになる、巡回の最後に神輿を川に投げ入れて自分たちも飛び込む、などさらに激しいものだったそうです。安久では祭りで田畑などに大きな被害が出たことがあり、そのために一時期中断していたほどです。

現在ではケンカもなく、川に神輿を投げ入れているのも間宮のみとなっています。また、祭りの主体もかつては青年団が担っていましたが、現在では保存会、町内会、町内の当番組など地区により様々です。



大場・間宮両地区では数年前から場所と時間を合わせて合流し、大きな声を上げて激しく神輿担ぎを競い合っている。（ただし、ケンカになることはない。）

間眠神社の例大祭と大注連縄

東本町二丁目の間眠神社の地には伊豆の国市長崎区の金子氏宅に祀られていた稲荷社が大洪水の際に流れ着いたとされるほごら祠が祀られていました。その後、伊豆蛭ヶ小島に流された源頼朝が源氏再興を願って三嶋大社に参詣した途上、この地の祠近くの松の下でしばしまどろんだため、「間眠神社」と称されるようになったそうです。

現在も長崎区の金子氏宅にはお稲荷さんが祀られており、「金子稲荷」と呼ばれています。長崎区では住民によって「金子稲荷」の前で大注連縄めなわがつくられ、8月1日の間眠神社の例大祭に奉納されています。



大注連縄づくり

伊豆の国市長崎区では例大祭の前日、7月31日に町内の男性総出で大注連縄づくりが行われます。年ごとに世話人5軒、担ぎ当番10軒ほどの役割分担があり、世話人は飲み物や食事の用意など裏方仕事を担当し、担ぎ手は例大祭当日に大注連縄を間眠神社へ運びます。

この大注連縄づくりはたいへんな労力を必要とするため、大正時代に注連縄を木製にして使いまわす、という方式に変更しましたが、間眠神社周辺の地区で厄災やくさいが続いたために毎年注連縄をつくる方式に戻して今日に至っています。



①ワラのごみを取り、水につけ、潰して、ワラをやわらかくする。

②①のワラで細い束をたくさん作っていき、それを2束より合わせて長い縄をなう(⑤で使用)。ピンと延ばして20メートル以上になるまでつくる。長い縄なので途中がコブにならないよう、均一につぎ足していくのが難しいとのこと。

③ワラの太い束を3本作る。両端が細くなるようにワラをロープで縛っていく。これが注連縄の本体になる。

④③の3本の束を重ねる。その内2本をねじり、その後残りの1本をねじり込み注連縄の本体を作っていく。

⑤カケヤ(大きな木づち)などで形を整えた後、②の縄で大注連縄を青竹の棒に結び付ける。④・⑤の注連縄を形づくる作業が最も力のいる作業になる。

⑥「化粧」といって表面に青いワラを付けていく。化粧の途中で初日の作業が終わり、集会所での食事会となる。翌日は早朝から担ぎ手によって化粧の仕上げが行われる。



間眠神社の例大祭

8月1日、間眠神社では朝から氏子会によって祭りの準備が進められます。鳥居の前に供物台が置かれ、祝儀の受付なども準備されます。シャギリが始められ、これは大注連縄が到着するまで続きます。注連縄到着前には境内にある山神社と琴平神社ことひらの前で神事が行われます。この頃になると人出も増え、注連縄を待つばかりとなります。

一方、長崎区では早朝から大注連縄の化粧が行われます。この日のラジオ体操の後には特別に子どもたちにお菓子を配ることにしており、子どもたちも完成間近の大注連縄を目にします。また、4升5合の赤飯が炊かれ、これも間眠神社へ運ばれます。朝10時頃になると間眠神社氏子会の代表者が迎えに来て大注連縄を間眠神社へ運びます。かつては間眠神社まで交代で担いで運んでいたそうですが、現在はトラックに載せます。トラックに載せる場所は年によって変わることがありますが、平成27年は金子氏宅からほど近い長崎橋横まで運び、そこでトラックに載せました。



間眠神社に着いた大注連縄は鳥居のすぐうしろに据え付けられ、本殿で神事が始まります。

神事は三嶋大社の宮司によって進められます。氏子は大社町、東本町一丁目・二丁目、南二日町にまたがっており、氏子総代のほか4町内会の代表者も列席します。その他長崎区の区長や金子氏なごらいなどが列席します。神事が終わると、隣接する東地区コミュニティ防災センターで直会が行われます。



①トラックで出発



②大注連縄の据え付け



③三嶋大社宮司による神事

大注連縄のその後

据え付けられた大注連縄は次第に傷んでいきます。昭和40年に屋根ができるまでは直接雨露を受けたため、翌年の祭りまでには腐って落ちてしまっていたそうです。しかし、屋根ができてからは大注連縄が傷みにくくなったため、祭りの1週間前にはずすようになりました。以前は境内で燃やしていましたが、今はお神酒をかけて焼却場に持ち込んでいるそうです。

なおらい 直会

祭りが一段落すると、直会、食事会などと称して酒食の会が開かれます。

日常生活とは違う雰囲気やひとつの祭りに参加した一体感の中で祭りの苦労や喜び、昔ばなしなど様々な話題に花が咲きます。祭りには欠かせない重要なひとコマといえます。



②安久 オテンノウサン



②長崎区 大注連縄づくり



②間眠神社 例大祭

祭りの今

伝統的な地域の祭りを継続していくにあたっては様々な変化が起きています。具体的な変化は祭りごと、地区ごとに様々ですが共通する特徴も見ることができました。

参加しやすい方法が変わっていく

多くの祭りで日程を土・日や休日にしたり祭りの内容を一部簡素化したりすることで参加者の負担を減らすような方策がとられています。また、かつては見られた極端な荒々しさがなくなってきており、これも祭りの担い手や祭りを取り巻く周囲の理解を得やすくするための変化なのかもしれません。

祭りをを行う主体が変わっていく・多様化する

ドンド焼きなら子どもたちの集団、オテンノウサンなら青年団、といったかつての実施主体だけで祭りをを行うことが難しくなっています。そのため、地区の事情に合わせて様々な人たちが参加・協力するようになっています。

祭りの意義が変わっていく

祭りには疫病を防ぐ、豊作を願うといった宗教的な意義、非日常的な娯楽のひとコマ、祭りの担い手の結束を強める、など様々な意義があります。そのなかでも現在の祭りを見ていくと、その地域特有の祭りを地域の誇りとして続けていきたい、祭りを通して薄れつつある住民どうしのつながりを維持したい、とくに災害時の助け合いにつながれば、と考える参加者が多いようでした。

今回紹介した祭りはここで行われています。



平成27年度企画展 三島のまつりの今

会 期：平成28年1月3日～4月10日
会 場：三島市郷土資料館

発行日：平成28年1月3日
発 行：三島市郷土資料館
三島市一番町19-3 楽寿園内
TEL：055-971-8228
FAX：055-971-6045